



ONE TEAM

先月の大型で強い台風19号は、各地に記録的な強風と大雨をもたらしながら北上し、東京を流れる多摩川、福島県や宮城県を流れる阿武隈川、長野県を流れる千曲川など一級河川を含む河川を氾濫させ、多くの地域で広範囲にわたり浸水・冠水の被害が出ました。多くの死傷者と、台風上陸から1週間以上たった時点でも、相当数の方々が避難生活を余儀なくされたほどに被害は甚大でした。被害にあった皆様方にはお見舞い申し上げます。それにしても、我が山形県は、自然災害の少ない恵まれた地域であることに、何時もながら感謝しなければと思っております。

おりしも、ラグビーワールドカップ(W杯)期間中ではありましたが、首都圏ではほとんどの公共交通機関が計画運休し、3試合が中止となりました。それでも、(運命の)13日夜の1次リーグA組最終戦の日本対スコットランド戦は、関係者の必至な努力の甲斐あって予定通りに実施されて、日本代表は強豪スコットランドを28-21で下し、決勝トーナメント初進出・8強入りを果たしました。国籍を超え「ワンチーム」で奮闘した我々が「桜戦士」の活躍もさることながら、日本国民の多くが各地で見せた



「おもてなし」が大会を盛り上げ、各国の選手を大いに感動させました。(釜石では、台風の影響でカナダ対ナミビア戦は中止になりましたが、両チームの選手やスタッフが災害ボランティアに参加する姿に感銘を受けました。) あらゆるところで国全体が「ワンチーム」となり熱狂し・盛り上がった日本大会は、永く記憶に残るに違いありません。

さて、秋の夜長、歴史書としては空前のベストセラーと喧伝されている(作家の)百田尚樹著『日本国紀』(幻冬舎刊)を読みました。序文で、「日本ほど素晴らしい歴史を持っている国はありません。…神話とともに成立し、以来二千年近く、一つの国が続いた例は世界のどこにもありません。…これが日本です。私たちの国です。…歴史とは「物語」なのです。本書は日本人の物語、いや私たち自身の壮大な物語である」と謳っています。これまで、『海賊とよばれた男』や『永遠の0』などの小説で馴染みがありましたので、歴史書は「暗記物」と窮屈に思っていました。が、「私たちの物語」とリラックスして読むことにしました。すでに70万部以上が発行されているとのことで、その評判も「世紀の名著」と誉める人もいれば、「トンデモ本」扱いする人もいますが、(特に、戦後史観で育って来た人にその歪みから覚醒のきっかけを与えるのではと)大方の読者には好評のようです。



今日まで史的唯物論の影響を受けた「戦後歴史学」が影響力を持ち、国家権力に対する民衆の闘いが歴史を変革してきたという立場のものが散見されたといわれます。これに対し「日本の歴史は誇っていいものだ」(いわゆる)右派による通史も国民の間では一定の支持を集めるようになってきました。この一環として企画された本書は、一作家個人の「私たちは何者なのか」の問題意識が、全体を貫くテーマとなっているようです。「2000年以上にわたる国民の歴史と激動にみちた国家の変遷を『一本の線』でつないだ、壮大なる叙事詩」としても、楽しめる作品でした。

